

---

# マジックワールド。魔法の世界へようこそ

ケン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マジックワールド。魔法の世界へようこそ

### 【Nコード】

N7088Y

### 【作者名】

ケン

### 【あらすじ】

これは突然、魔法の世界に来てしまった少年、如月集の波乱万丈な物語である。

## ブローグ

「はゝ最悪。理科の点数が50点ってやばいわゝ」

一人の学生服を着た少年が悲壮感を漂わせながら歩いていた。

彼の名は如月 集

とある高校に通う高校一年生である。

ちなみに今日は考查返却日であり

全教科が帰ってくるという地獄の日であった。

「はゝ余裕ぶっこいてたらまさかの計算ミスで  
十点落とすとかほんまないわゝしかも

数？も計算ミスで十五点落とすし、ほんま最悪」

しかし少年の顔はそんなに気にしていなような顔だった。

「ま、いつか。興味無いし」

この少年はある出来事により物事全てに興味が

消え失せ気分で物事をこなし、

勉強も良い点を取ったら親が喜ぶので

頑張るという事だった。

とは言ってももうその親も去年に事故死した。

「・・・・・・・・・帰ろ」

「ただいまゝって言うても誰もいないから言っても意味ないか」

集はブレザーをかけて制服のままでベッドに横たわった。

集の家はとても人が住めないような部屋だった。

さらにこの家の家賃は破格で借りる人が相次いだが  
借りた人は全員1か月も経たずに引っ越したという

曰くつきの一室だった。

へはへしょうもないな。この世界。何かいいこと無いかな。  
いや、それよりも今の生活は普通すぎるから刺激がほしいな。  
例えば・・・このまま寝て起きたら別の世界に  
いたりとか！良いな、それ！・・・な事ねえか。寝よ寝よ

集はそのまま目を閉じ10分後には熟睡してしまった。  
自分の言っていたことが現実になるとも知らずに。

## プロローグ（後書き）

こんばんわ。初めまして。ケンと申します。  
一次創作を書くのは初めてです。  
今まで二次創作をやってきましたので。  
これから、よろしくお願いいたします。

## 第1話 目が覚めたら魔法の世界！？

「んゝ今何時だ？」

集が時計を探そうと手を動かすがその時計が見当たらなかった。

「ん？何でないんだ？それにこの感触・・・草か？」

不思議に思い目を開けると・・・

「な、何ここ」

周りは草ばかりで集の部屋ではなかった。

「ここどこ？・・・ま、いつか。

興味無いしな。一回散策するかな」

集は一旦、周りを散策する事にした。

「ほんとなんなん？ここ」

散策してみたがあまり情報は得られなかった。

すると後ろに何かの気配がして振り向いてみると

「・・・」

よく絶世の美少女を見ると目が離せないと

クラスメイトが言っていたがその事がようやく

分かった。その姿は赤い服に黒いマントを

はおり腰には刀を差しており

髪の毛は肩にピツタリと切りそれられていて

なお且つきれいな黒髪だった。

「あ、あの少女」

集が言いかけた時突然、その少女は刀を抜き

切りかかって来た。

「ひっ！」

集は慌てて横に避けるとその刀は切り返され  
首に向かつてきた。

「うわああああ!!」

集は恐怖のあまり腰を抜かしてへたり込んでしまった。

そのお陰で何とか刀は髪の毛を少し掠るぐらいで避けた。

「!!!!!!」

その少女は驚いたような顔をしたがすぐさま

冷静になり集に向けて刀を振り下ろそうとするが

「・・・・・・・・」

集と目が合い数秒固まった後に刀を下ろした。

「は、はは。よ、良かった」

「すまない。どうやら君は違ったようだ」

「え、何が？」

「いや何も無い。立てるか？」

「んゝ無理ですね。手を貸してくれませんか？」

「ああ、良いとも」

「すみません」

集が少女の手に触れた瞬間、集の頭に映像がよぎった。

『・・・・・・・・・・か？』

『・・・・・・・・・・さ。・・・・・・・・・・ず・・・・・・・・・・る』

へな、何これ？何で女の子が泣いてる？

何でそんなに悲しそうな顔をしてるんだ！

その映像は画質が粗く音も

割れすぎていてほとんど聞こえなかった。

「大丈夫か？」

「え？あれ？」

先程の映像が急に消え普通の景色に戻った。

「あ、ああ大丈夫です」

「そうか、すまないな。急に襲ったりして」

「い、いえ別にそんな」

「所で君はこの者だい？あまり見ない顔だが」

「へ？どこって日本人ですけど」

「ニホンジン？そんな国あったか？」

「は？いや日本ですよ？日本」

「何を言ってるんだ君は？ニホンジンだとかニホンだとか不思議な言葉を使っているが」

「す、すみませんがここはどこで、何て言う場所ですか？」

「何を言ってるんだ？ここはユートリスで

この地域一帯はコラリスではないか。

本当に大丈夫か？」

集は困惑していた。何せ聞いたこともない地名が出ていたのである。

「ユートリス？コラリス？何じゃそりや。……」

ま、いつか。向こうの世界も飽き飽きしてきたし。

ここは受け入れるか」

「す、すみません。最近ここに来たもので」

「ふむ、そうか……。所で名は？」

「ああ、そうでしたね。僕の名は

如月集って言います。貴方は？」

「私は桜ゆえだ。よろしく頼む」

「はい！」

お互いに握手を交わした。

「ひとまずはその格好を何とかしないと」

「へ？あ」

よく見ると集の制服は土だらけで元の色が見えてなかった。

「私の家に行こう。すぐ近くだから」

「ええ、分かりました」

森を出るとそこにはたくさんの露店が立っており



人々の活気の言い声が聞こえてきた。

「あ、どうだい！その奥さん！このネックレスきれいだよ？」

「おばちゃん！頂戴！」

「へー結構広いですね」

「まあな。ここはこの地域では一番規模が大きいマーケットだからな。所で君はどこからきたんだ？」

「え、えーつとですね。まあ、遠い所から」

「そうか、長旅で疲れて寝てしまったのか？」

「ははは！！そうなんですよ！」

「ならば宿にでも泊まれば良かったものを」

「じ、実は今お金が一文無し何です」

「一文無しとは何だ？」

「しまったーここは日本じゃないから

ことわざとかも知らないんだった」

「あ、いや僕の国の決まり文句でしてね。

お金が全くない事を言っんですよ」

「ほー初めて知ったな。今度詳しく教えてくれないか？」

「え、ええまあ」

「うむ。約束だぞ！」

ゆえはとてもきれいな満面の笑みで集に笑った。

「はい！」

集も満面の笑みで笑い返した。

「ここが私の家だ」

「へー結構大きいんですね」

「ふふ、まだ小さい方だぞ？」

そこには結構大きめの家が建っていた。

広い庭がありきれいな花や木々がたくさん生い茂っていた。

「あら、ゆえちゃん。御帰りなさい。

その隣の男の子は？」

「ああ、紹介するよ。この子はさつき森であった旅人の如月集だ。それでこっちが私の母だ」

「はじめまして。如月集と申します」

「ふふ、そんなにかしこまらなくても良いわよ？

私はゆえちゃんの母の桜ゆいです。

よろしくね〜集君」

「はい、よろしく願います」

「ま、ひとまず中に入ろうか」

「あ、はい」

「上がって頂戴」

ひとまず集は客室に案内された。

「ひとまず集。体を流してきたらどうだ？」

「あ、はい。そうさせて頂きます」

「そんなに畏まらなくていいぞ？」

「え、あじゃあ、分かった」

「ああ。シャワー室はそこを右に曲がった突き当りだ。タオルなどは後で持つて行くよ」

「ああ、ありがとう」

「覚悟はしていたけどお風呂じゃないか〜」

集が入った場所はお風呂ではなくただ単にだだっ広いシャワーだけの浴室みたいなものだった。

そこで、集は一応体を洗い貸してくれたタオルを使い、服も借りた。

「ああ、上がったのか。集」

「ああ、ありがとう。さっぱりしたよ」

「まあ、座れ」

「うん」

「ではまずは君の話を詳しく聞かせてもらおうか？」

「へ？何の事？」

「惚けない方がいい。私の勘は良い方だな。

君はこの・・・いやこの世界の人間じゃないんだろう？」

「！！！！！！」

「図星か」

「うん」

「話してくれないか？何か力になれるかもしれない」

「分かった。話すよ」

それから集は今までの事を話した。

自分は異世界から来た者で日本という国の事など

「そうか。つまり君は異世界から来たという事で良いかな」

「うん。ま、気にしてないけど」

「元の世界に戻りたくないのか？」

「何で？」

「何でって君が今まで過ごしてきた世界なんだぞ？」

そして突然目を覚ましたら異世界って怖くないのか？」

「興味無いね」

「何？」

「僕は別にどうなろうが興味無いよ。そこで起きたことに関しては僕は全部無条件で受け入れるからな」

「・・・何があつたんだ？」

「・・・何もなかったよ。何もね」

そっう集の目は悲しそうな顔をしていた。

「そっう言えば集はこんなのを見た事はあるか？」

「ん？」

するとゆえが突然、手のひらから炎を出した。

「……………へ」

「むむ？感動すると思ったんだがな。これも興味無いのか？」

「ああ、無いね。全く」

「そう言いながらもお前、ガン身だぞ？」

集は炎を近くでまじまじと見ていた。

「……………凄いな。僕にも出来んのか？」

「分からないな。君はこの世界の住人ではないからな。

この世界では幼い頃からこれを勉強してるらな」

「それって魔法なのか？」

「ああ、魔法だよ」

「……………教科書あるか？」

「ああ、あるがどうするのだ？」

「見せてくれ！！俺もマスターしたい！」

その目はきらきらしていた。

「い、良いぞ。後ろの書庫に大量にあるから見えていいぞ」

「よし！」

そう言い集はダッシュで書庫に向かった。

「あら？集君は？」

「集なら書庫に行ったよ」

「あらそう。折角おいしいパンを作ったのに」

「まあ、後で分からなくなっ出てくるさ。

その時に食べさせよう」

「そうね」

そして夜

「おい。集、大丈夫かゝ入るぞ」

ゆえが入るとそこには……

「何をしてるんだ？」

「・・・・本の海で泳いでる」

本の山に埋もれた集がいた。

「それよりも晩御飯だぞ」

「ああ、悪いな」

集はゆえに連れられ晩ご飯を食べ  
また書庫にこもり一日を過ごした。

## 第1話 目が覚めたら魔法の世界！？（後書き）

こんばんわ。連続更新です。

如何でしたか？

感想もお待ちしております。

それでは、さよなら

## 第2話 目覚めの時 Wake up!!!

「んゝいい朝だ。さてと起きるk」

ゆえが起きようとした時、庭で大爆発が起こった。

「な、何だ!？」

「ご無事ですか!？お嬢様!!」

「ああ、私は大丈夫だが何が起こったんだ？」

ゆえが執事に尋ねた。

「分かりません!庭の方であつたみたいですが」

「私が行く」

「・・・お気をつけて」

「ああ」

ゆえは黒いマントをはおり刀を持って庭に出た。

「・・・切つていいか？」

「だ・・・め・・・に・・・きま・・・てんだろ」

そこには黒焦げになつた集がいた。

「一体何をしたらこんな大きな穴を開けるんだ？」

「いやゝ実はさ、昨日書庫の本、全部読み終わったからさ。

俺も魔法を試みようと思つてさ」

「あの書庫には数万冊の本があると云われてるんだぞ！

それに君はまだこの世界の言葉を知らないんじゃないんじや!!」

「だからまずは文法の本から読み漁った。本読むの好きだし

読む速さも自信あるし。最後には

なんだっけ？だ、だい」

「大魔法全書か？」

「そう!それを読み切つてやったら爆発した」

「どれどれ・・・!!!!」

ゆえが見たページには賢者クラスと書いてあり  
そこには炎の最大魔法が記されていた。

「流石に最大魔法はきついな」

「集。君はどれからしたんだ？」

「それだけど？」

「はゝ死ぬ気か。まずは初級魔法からだろっ」

「ああ、そうだな。よし！いくぜ！」

集が手のひらを返すと炎が出たことには出たが  
音だけがデカイ音爆弾みたいな魔法だった。

「うおー！」

「ふむ。炎はダメと、よし次だ！」

「お、おう！次は水だ！」

もう一度出すと今度は大洪水のような  
大量の水が溢れ出しゆえに直撃した。

「ぶっ！」

「あ、わ、悪い。ゆえ。だいじょうぶ……ぶ……か？」

ゆえは怒ったかのように体から炎を出し水分を飛ばしていた。

「次だ」

「は、はい」

低い声で脅された。

「っ、次は」

「君はある意味凄いな」

「……」

ゆえの真下にはぼろぼろになった集がいた。

「雷を出せば感電し、自然を使えばつるが自らを縛り  
無機を使えばがらくたが出て、肉体強化を使えば  
豚みたいなデブになった」

「仰る通りです」



「つまり君は今のところはどの属にも属してはいない」  
「でも、まだ属はあるぞ」

「闇と氷だな。だが闇に関しては魔族のみが使える  
氷に関しては机上の空論だ」

「あゝ最悪だゝ」

「集よ」

「何ゝ？」

「学校に行ってみてはどうだ？」

「は？学校？」

「ああ、そうだ。学校に行けば詳しい原理などが学べるぞ」

「でも、俺が行けるのか？」

「どうしてだ？行きたくないのか？」

「そりゃ行きたいけど学費とかがだな」

「ああ、それなら大丈夫だ」

「何で？」

「私の父は騎士隊の隊長だからな」

「騎士隊って？」

「騎士隊とはその名の通り民間を護るために結成された」

その騎士隊はどの人物も名だたる魔法使いがいるんだ」

「ふゝん。興味無いな」

「まあ、良い。それでどうする？行くか行かないか」

「…………行く」

「よし！ならばさっそく準備に取り掛かろう！！」

それから忙しかった。

まずはゆえの父に了承を得るために会ったり  
服を取りそろえたり等など色々な事をした。

そして……

「ふああああゝ」

「おいおい、本当に受験生か？集」

ゆえと集は学校の前にいた。

「ここが」

「そうだ。ここが私を通つてる

シルバロン魔法高等学校だ!!」

そこには真つ白な建物に闘技場のようなもの。

それに寮の様なものやさらにはお店までもが完備されていた。  
すると二人の前に一人の女性が突然現れた。

「うお!!」

「はじめまして。貴方が如月集君ね？」

「はい」

「私は今日一日貴方の試験官を務める

フリーリ・ブリュッセルだ」

「よろしくお願いいたします」

「ああ、よろしく頼む。早速会場に行こうか。

桜さんも来るが良い」

「はい!」

二人はフリーリに連れられて試験会場に案内された。

「まずは今日一日の日程を説明する。

まず、この編入試験は一日を通して行われる。

まずは一次試験の筆記テスト。次に

二次試験の身体能力を計るフィジカルテスト。

最後に魔法戦闘を見る実技試験だ。質問は無いかな？」

「はい」

「よし、なら始めよう」

「がんばれよ!集」

「ああ、任せろ」

こうして集のテストは始まった。

一次試験：筆記テスト  
「結構難しいな。でも、基本を応用にしてあるだけだから解けない事はない」

二次試験：フィジカルテスト

「このテストでは攻撃魔法を避けてもらうぞ。自分の魔法は無しだ」

「了解」

「では、始めるぞ！！」

合図とともに次々と魔法が放たれた。

炎の玉や雷の弓の様なもの、

水を周りに敷いて雷を全体に通すものなど

ハイレベルな攻撃が行われた。

「はい。そこまで！次でラストよ…」

と言いたいけど昼休憩よ」

「りよ、了解」

休憩室

「お疲れさまだな。集」

「ああ」

「しかし貴様は避けるのだけはピカイチだな」

「そうか？」

「ああ。ここの入試試験はかなり厳しいものだ。

そして編入試験はさらに厳しいものだと言われている。

私もやったが一回は当たってしまったぞ」

「偶然だよ。偶然。じゃ、そろそろ行くわ」

「ああ、行って来い！！」

「お疲れ様。これで最後よ」

「はい」

「内容は私と全力勝負よ」

「了解」

「さっきの試験でこの人の攻撃は

大体読めた。あとは」

「言っとくけどさっきの試験の魔法はかなり手加減したから」

「！！」

「本気で来ないと」

フィーリは手に炎を纏わせ地面を殴った。

すると…

「ま、まじで？」

地面が大きくへこんだ。

先程の試験では全く傷すらつかなかったものが。

「死んじゃうわよ？」

「ひい！！」

最終試験が始まった。

別室

別室でゆえが二人の勝負を観戦していた。

しかし、その内容はフィーリが圧倒的に有利な状況だった。

「まずいな。今の集はまだ魔法をキチンと使えていない。」

それに自分にあつたものも未だに分からない」

ゆえが考えていると後ろから何人かの人物がやって来た。

「おーおーやってるやってる」

「珍しいな。貴様らが見に来るとは」

そこには5人の少女と1人の少年がいた。

「別に良いでしょ？ 私達も見に来たいときもあるわよ」  
金髪で露出度がかなりきわどい少女が話した。

「いい加減貴様のその破廉恥な服はやめろ。目に毒だ」

「あら。それでもスタイルは抜群よ」

金髪の少女が言うとおり腰はかなりくびれており  
胸もかなり大きく顔も整っており  
軽く化粧をしていた。

「ゆえ……正解……貴方……凄く……破廉恥」

「貴様も貴様だな」

今喋った少女は緑色の髪の毛に

身長は少し低めできれいというより

可愛いという言葉がぴったりだった。

「彼……噂……人物」

「ああ、そうだ。彼は」

ゆえが言いかけた時少年が口をはさんだ。

「如月集。生年月日・身長・体重・年齢と共に  
不明な少年だ。おれでも名前しかわからなかった」

「へーこの国一の情報通と謳われるあんたでさえ  
分からないなんてね。ミステリアスで良いじゃない」

少年は服にかなりのチェーンを巻きつかせ動かたびに  
じゃらじゃら言っていた。

もう一人の少女は青い髪の毛をしていた。

「……………」

何もしゃべらない少女は黒髪で腰ぐらいまでの  
長さの髪をしていた。

「なあ、何であいつ魔法使わねえの？」

「私…不明…回答…要求」

「ああ、集は、そのだな」

「魔法が使えない、いやまだ眠っているのか」

「……！！！！！！」

その場の空気が一気にピリピリしたものに変わった。

「へー貴方が来るなんてね。今日は大雨の日かしら？」

「悪いが俺は雨男ではない」

この少年は髪の色が6色に分かれていた。

「何故その事を？」

「何となくだ。貴様らも感じているんだろ？未だ

感じたことのない気配を」

「………」

「まあ、その内、面白くなるさ」

「はあ、はあ」

「どうして魔法を使わないの？」

「さあね」

「余裕をこいてる訳でもなさそうね。

まあ、良いわ。これでフィニッシュよ！！」

フィーリは左右の手から炎を出した。

「ねえ、知ってるかしら？水を急に熱するとどうなる？」

「水蒸気となり気化されるだろ？」

「そう。でもその水蒸気って結構」

「！！！！！！」

「気付いたようね。でも、遅いわ」

フィーリは巨大な爆発を起こし一気に水を気化させた。かなりの熱を持った水蒸気を発生させた。

「集!!」

その光景を彼女たちも見ていた。

「あゝあ。残念。フィーリ先生の得意技来た」

「あれは未だに完全に防げる気がしないぜ」

「私…同感」

「終わったわね。帰ろうかな」

三人の少女達が帰ろうとした時

「待て。これからだ」

「「「?????」」」

「さあ、見せてみる。お前の魔法を」

「あちゃゝやりすぎちゃったかしら?」

フィーリはのんきに考えていた。

「でも、これであの子は…???」

突然フィーリの体が震えた。

「寒!!それに息が白くなるほど気温が下がってる

……まさか、彼がこれを?」

フィーリは集を見てみるとそこには

「う、嘘でしょ」

巨大な氷がそこにはあった。

第2話 目覚めの時 Wake up!!! (後書き)

おはようございます!! ケンです!!  
如何でしたか?

今日確認したらアクセス数がまさかの14でした。

確認したとき、まじで?と思いました。

まあ、二次創作とは違って一次創作は

ヒットしにくいですからね

感想もお待ちしております!!

それでは



### 第3話 全てを凍らす者

「ここはどこだ？」

集は浮遊感を感じていると

頭の中に声が響いてきた。

「ふむ、貴様が呼んだのか？」

「誰？」

「私は氷の魔法の……まあ何だ、そう言う事だ」

「全く分からないんだけど？」

「つべこべ言うな。で？どうする？」

「何が？」

「貴様は氷魔法の力が欲しいか？」

「氷？氷魔法は確か机上の空論だけ」

「違うな。その昔大きな魔法戦争があった事は知っているだろう」

「うん、まあ」

「そこでその戦争を止めた英雄はだれだ？」

「確か炎、雷、水、闇、無機、自然の魔法使いじゃなかったけ？」

「そうだ。だがそれは口伝え故に一つ消えた属性がある」

「それが氷？」

「そうだ。さあ、どうする？このまま死ぬか

奴を倒し合格するか！！選択するんだ！！」

「僕は……合格するんだ！！合格してこの世界で

楽しく過ごすんだ！！だから力を！！」

「良いだろう！」

「こ、氷？」

「あいつ何をしたんだ？」

「氷の魔法は存在しないんでしょ？」

「……………」

「不明…実際…目の前…起こってる」

「見る！氷が碎けるぞ！」

ゆえが叫ぶとともに氷が碎け現れたのは…

「集なのか？」

白い髪の毛に変化した集が立っていた。

「そ、そんな氷の魔法は存在しないんじゃない！」

「……凍れ」

集が地面を蹴ると共に辺り一帯が凍り始めた。

「ああ、もう！！」

フィーリは自然の魔法で大木を出現させそれを足場にして空中に飛び上がった。

「空気は凍らせられないでしょ！！」

「ふん、なめんなよ」

集の足もとが凍りだし氷柱となり一気に伸びて近づいた。

「う、嘘！！」

「空中では動けないよね？」

集が空気を叩くように振舞うとフィーリを巻き込み凍った。  
「どうだ？」

しかし、氷が突然割れ一人の男が現れた。

「ん？貴方は？」

そこには六色の髪の毛の色をしている少年がいた。

「すまないな。割り込む気はなかったんだが今の君は危険すぎるため、割り込ませてもらった」

「じゃ、じゃあ試験は？」

「合格でよろしいですね？フィーリ先生」

「ええ、文句の言いようがなく合格よ」

「よっしゃー！！」

喜んだ瞬間、集は気を失ってしまった。

「ん？ここは」

「目が覚めたか、集」

目の前にゆえがいた。

「うん、でもここは？」

「ここは」

「ここは保健室よ！！」

「？？？」

後ろからドアが蹴り破られたかと思うと五人の少女が出てきた。

「え、えつと誰？」

「ああ、紹介しよう。まずは破廉恥娘だ」

「誰が破廉恥娘よ！！私の名はライカ・サイトよ！！」

ライカで良いわよ！」

「は、はあ」

「じゃあ、次は私ね？」

私は水識ラナよ？ラナで良いよ？」

「ど、どうも」

「私…名前…フォレル・シンラ。

…フォレル…良い」

「な、何故に片言？」

「昔かららしい」

「……」

「ほらあんたも挨拶、挨拶」

「……」

黒髪の少女がライカに耳打ちした。

「大丈夫だって！さあ、早く」

「わ、わた、私の」

黒髪の少女が名前を言いかけた時、集が突然頭をなで出した。

「ふえ？」

「そんなに怖がらなくても良いよ。」

僕は君を拒絶なんかしたりしないから」

「…うん！私の名前はルーラ・ダークって言うの！！  
ルーラで良いよ！！」

「珍しいわね」

「確かに、ルーラが初対面の人に怖がらないとは」

「ねえ、集君だっけ？」

「はいそうですか？」

「何で君はあの時なでたりしたの？」

「何となく僕と同じような気配がしたから」

そう言った途端、集は顔を悲しそうに背けた。

「そう。深くは追求しないわ。これからよろしくね？」

「ええ」

「これで集も私達と同じ学校か」

「一緒のクラスになれたらいいな」

「そうですね。それでいつから何ですか？」

「ああ、今は長期休暇だから恐らく登校は長期休暇明けだな」

「そっか、楽しみだね！集！！」

「ですね。ルーラさん」

「もう！ルーラで良いよ！！」

「癖だね。まあ、一週間もすれば治るよ」

「そっか、じゃ、そろそろ帰ろうか？」

「だな。では集、帰ろうか」

「うい」

理事長室へ

「ふむ。この子が例の」

「はい」

「で？どうだったかな？机上の空論の氷魔法は」

「はい、実際戦ってみて応用性、破壊力ともに

目を見張るものがあります。しかし、まだ彼は発現させて  
日が浅い為に威力にむらがありました」

「ふむ」

「それに試験が終わった後、気を失うほどまでに  
疲労していました」

「そうですか。ですが将来性はあると」

「はい」

するとドアがノックされた。

「どうぞ」

「失礼致します」

先程の六色の青年がやって来た。

「相変わらずカラフルな髪の色ですね」

「そうですね。染髪してもすぐに抜けちゃいますので」

「それで、どうでしたか？」

「はい。過去の文献を徹底的に漁ったところ

やはりある時代の所で意図的に氷魔法の

文献が消されていました」

「そうですか。それでその時代は？」

「魔法革命時代です」

「そうですね」

「どうなさいますか？」

「んゝ今は観察という事にしておきましょう」  
「分かりました。失礼致しました」

「如月集君か。楽しみだ」

その顔はまるで子供のような純粹な笑顔だった。  
実際子供の様な姿だが

「あ？」

「どうしましたか？理事長」

「いや、今子供と言われたような」

「気のせいでは？」

「だな」

続く……………

### 第3話 全てを凍らす者（後書き）

こんばんわ！ケンです！

いや〜一次創作は難しいですな〜

今日アクセス数確認したらまだ、51人でした〜

まあ、まだ連載しだして二日目ですからね〜

これから増えて行く事を祈っています。

それよりも如何でしたか？

次回で集が学校に編入致します。

それでは、感想もお待ちしております。

さよなら〜

## 第4話 初めての登校日

ここは学園の地下にある訓練場。

年中余程の事がない限り開いており

生徒が鍛練するのにもっとも最適な場所である。

今この場所で二人の男女がいた。

ゆえと集である。

「ふむ。ではやってみろ」

「ああ。行くぜ!!」

集が地面に手を置くとその箇所が徐々に凍り始めていき最終的に巨大な氷の花を咲かせた。

「うむ。前に比べるとムラもなくなって

威力も安定している。それに疲労も少なくなった」

「そうか？」

「ん？何か不満なのか？」

「ああ、まだ何か足りない気がするんだよ」

「何かとは何だ？」

「それがさつきから考えているんだが分からないんだ」

「難儀な話だな」

「ああ。まあ、前よりも疲れもないし。

成長はしたかな？」

「そうだな。だが、まだ鍛練しないといけないぞ」

「ああ、次やろう」

集が言おうとした途端に訓練場のドアが蹴り破られた。

「おっはよー！！！！」



「おはよ」

「…おはよう…」

「おはよう？」

「ああ、皆おはよう」

「おはよう」

上からライカ、ルーラ、フォレス、ラナである。

「朝早くから熱心な事ね」

「こうでもしないと力の意味が無くなるから」

「…言うとおり…同感」

「で？どうだったの？集」

「うん。だいぶ前よりかは使い方は上手くなったよ」

「そっかゝねえ、今度私と模擬戦しようよ！」

「ああ、そうだな。僕も一回皆と闘いたいな」

「ふふふ、力の差を見せてあげるわよ？」

「そんな事よりもう行くぞ。始業式が始まるぞ」

「…了解…」

「ここか？理事長室は」

集は今大きな扉の前にいた。

「よし、失礼します」

「はい」

集が入るとそこには小さな子供？がいた。

「理事長ですか？」

「うむ。私がこの学校の理事長だよ」

「理事長！」

「あ、やばい！」

すると理事長は集の後ろに隠れてしまった。

「あ、あれ？集君、理事長知らない？」

「ええ、知りませんが」

「そう、ありがとう」

「もういですよ」

「ふうすまないな。君が如月集君だね？」

「はい。え〜と本当に理事長ですよ？」

集は真下にいる小さな子に視線を合わせた。

「そりゃー！！」

「ぐえ！」

突然、顎に頭突きを貰った。

「ふん！初対面の人にそれは無いのではないか？」

「す、すみません」

「まあ、良い。もう慣れたしな。さて、君のクラスなのだが」

「はい」

「ああ、その前に言う事があった」

突然思い出したかのように言いだした。

「君の魔法なのだがね」

「はい」

「出来るだけ、使わない方がいい」

「何故ですか？」

「君の魔法は氷だったね？」

「ええ、まあ」

「それは今の常識では有り得ない魔法なんだ。」

まあ、昔は常識だったみたいだがね。

それに、今は不穏な動きを見せる輩もいるからね」

「分かりました。出来るだけこれは使いません。

でも、誰かの命が関わつてるときは使いますよ？」

「ああ、そこら辺の判断は君がするといいさ」

「はい、それでクラスは？」

「ああ、すまない。クラスだったね。君には選ばせてあげよう」

「へ？」

「実はなこの学校の入試・編入試験で優秀な成績を取った者にクラスを自由に決める権利を与えているんだ。そこで、君は史上初の全教科満点だ」

「まじですか？」

「おおまじです。何組が良いんだ？」

「ちなみに上から優秀な輩が集まっているぞ」

クラス表には全部で10クラスが書いてあった。

「……………だったら僕は8組で」

「ふむ。何故だい？君の実力ならば

余裕で1組に入れるんだがな」

「何となくです。それに僕ってトップの

クラスって嫌いなんですよね」

「何でだい？」

「僕は自由に生きたいんでね」

「ふん。分かった。では、君は8組の29番だ」

「分かりました。それで、担任の先生は？」

「ああ、担任は」

「私ですよ。集君」

そこにいたのは編入試験で戦ったフィーリ先生だった。

「フィーリ先生！」

「おはよう。じゃあ、行きましようか？」

「はい！」

こうして集は8組に在籍する事になった。

「……出てきなさい。隠れてるのは分かってるぞ」

「おやおや、バレてしまいましたか。さすがは  
ブリュンヒルデ  
最強の乙女」

「たわけ。それは昔の名前だ。今は」

「か弱き乙女ですか？」

「分かっているじゃないか。第三位。で？何の用だ？」

「まあ、少し興味があるお話を

されていたので聞きたいと思ひましてね。

それとその第三位という呼び方はよして下さい」

「ふん。まあ良い。だが残念だったな」

「そうですね。彼なら確実に1組に来ると思つたのに」

「私も安心しているよ。あんな人間とは思えない奴らのいる  
1組に入らずに済んで」

「おやおや、えらい言われようですね」

「そうか？あそこは実力主義の馬鹿が集まるところだからな」

「それは自分も同感ですね。貴族の在籍率が

この国ではトップの学校ですから」

この世界には貴族と呼ばれるものが存在している。

貴族はその昔、活躍した偉人達の血を

継いでいると言われておりその子孫たちは

かなり優遇されている。

しかし、その影で権利が暴走しており差別などが今日の問題となっている。

「私は貴族というものが嫌いだな。力もないひよっこ共がギャーギャー、親の七光で叫んでいるようにしか見えないんだがな」

「そうですね。下のクラスにも彼らよりも優秀な生徒はいますから。ま、どの時代でもそういう咬ませ犬は存在していますから。しかし、そのお陰でこの学校も一躍有名となっているでしょ？」

「私は名声などには興味がなくてな。この学校は先祖代代ひっそりと受け継がれてきたものだ。今頃、ご先祖様は泣いておられるだろうな」

「ふふふ、そうですね。まあ、考えは人それぞれありますからね。そろそろ時間ですので私はこれで」

「ああ、その前に言う事があるぞ」

「何でしょうか？理事長」

「今年は気を付けた方がいいぞ。何せ彼がいるのだからな」  
「如月集君ですか…忠告として受け取っておきましょう」

そっくりい少年は消えた。

「さて。この学校でどんな事を  
パaddockス  
してくれるのかな？異世界人」  
理事長はその顔を歪めさせ笑った。

「じゃあ、私が言ったら入って来て頂戴」  
「分かりました」

先にフィーリが入っていくと先程まで騒がしかった教室が静かになり号令が響いた。

「おはよう、皆」

「……おはようございます!!」「」

「はい。じゃあ、SHRを始めるわね。まずは皆長期休暇はどうだったかしら？」

今日から心機一転してやっていきましようね」

「先生は男、出来ましたか？」

「……成績を十段階ほど落としておこうかしらね」

「す、すみませんでした!!!!」

教室から笑い声が響いた。

「あの人独身だったのか」

ちやっかり初めて知った集だった。

「それよりも今日はビッグニュースがあるわよ」

「もしかして先生が30代に入ったとか？」

「……来年は留年かしらね」

「す、すみませんでした」

「そうじゃなくて今日は転校生よ!!」

「……おおおお!!!!」「」

「こんな時期に転校生？」

「男かな？」

「男だったら狙おうかな」

「じゃあ、入って来て頂戴」

そう言われ集はドアを開けて入っていった。

「……」「」

「えゝ如月集です。分からないことだらけですが  
よろしく願います」

「「「.....」」」

「「「きや」」」

「きや？」

「「「きやあああああああ！！！！！」」」

「！！！！！！！！」

突然、女子生徒がソニックブームの様な甲高い叫び声をあげた。  
実際に窓ガラスが揺れていた。

「カッコいい！！」

「あの、白い髪に静かなオーラ。クール！！」

「この国に生まれてきてよかった！！！！！！！！」

「はい。静かに！！じゃあ、如月君の席は端の席ね」

「はい」

「じゃあ、この後は教室で放送による始業式があるからね」

「「「はーい！！」」」

「あゝ疲れた」

「にやははは！！大変だなゝモテ男め」

「ん？君は」

「ああ、俺はゼロ・エスターテって言うんだ。よろしくな！！」

「ああ、よろしく！！」

「それで、お前の魔法は何なんだ？」

「ああ、僕は…秘密だよ」

「うゝケチだな」

その後、ゼロを通してクラスのみんなとは知り合いにはなった。  
そして、始業式も終わり授業は明日からという事で  
今日は午前中には帰宅となった。

「んゝ眠」

「おお、いたいた」

「ん？ゆえか」

「私達もいるわよゝ」

ひよこつと皆が現れた。

「ねえゝ集って何組なの？」

「僕は八組だよ」

「ふゝん。集なら上のクラスに行くと思ったのに」

「どうも、上のクラスって好きじゃないんだよな」

「ふゝん。あ、ちなみにここの皆は全員一組だよ」

「一組か。また遊びに行くよ」

「あゝそれは辞めておいた方がいいわね」

「どうして？ライカ」

「一組…貴族…多い…差別…黙認…ひどい」

フォレスが片言で呟いた。

「ああ、この学校はこの国で  
最も貴族の在籍率が高くてな」

「あいつらは一組の奴らには優しいけど」

「他クラスには平気で魔法の的にしたりとかするんだよ」  
ラナとルーラが補足した。

「ひどいな」

「ま、集なら問題ないだろう」



「だと良いけど」

「心配…集」

「ま、今日は帰りましょ」

「そうだな」

「おい、見たか今の奴」

「ああ、見た」

「あいつ一組じゃないよな？」

「ああ、カスクラスの癖に我らの

姫たちと対等に話している」

「これは報告だな」

後ろにその光景を恨めしそうに見ていた生徒に気付かずに。

#### 第4話 初めての登校日（後書き）

こんにちわ！！ケンです！！

如何でしたか？

一時創作は難しいですね。

こんな作品をお気に入り登録してくださった方には感謝です！！

感想もお待ちしておりますので。

それでは！！

## 第5話 決闘の申し込み、そしてランカーの存在

只今の時刻、朝の5:00.

「んゝよく寝たゝさで、起きるとするか！」

桜ゆえの朝は5:00から始まる。

まずは、顔を洗い軽く歯を磨いた後

家の周りをジョギング。そして魔法の鍛錬を行う。

そして、それを三十分で終わらせた後

剣を振るう。それを幼いころから続けてきた。

それを15分間した後は今日の

座学の予習を行う。

これが終わった時間に集が起きてくる。

この繰り返し。

「遅い。何故今日は集が起きるのが遅いんだ」

ゆえは居間でイライラしながら待っていた。

何故待っているのかというと集の鍛錬に付き合っ為である。

集はまだ、細かい魔法の操作が粗いためそれを

鍛錬するのだが今日は遅かった。

「仕方がない。起こしに行くか」

ゆえは集の部屋へと足を運んだ。

「起きろ！集！時間だぞ！！」

ドアを強く開けると部屋から冷気が漏れてきた。

「寒いな。仕方がない」

ゆえは全身に炎を薄くはると集に向かって行った。

案の定、集は気持ち良さそうに涎を垂らしながら熟睡していた。

「やれやれ。起きろ、集!!」

「うお!!」

耳元で叫ぶと集が飛び起きた。

「鍛錬の時間だぞ」

「へ?もうそんな時間?」

「ああ、とつくに過ぎている」

「行こうか」

「ああ」

「集。その寝癖は何かなんのか?」

「めんどくさいからしないでだよ。始めようか」

「ああ」

こうして朝の時間帯はこうして過ぎて行く。

「つ、疲れた」

「やはりお前は細かい魔法が苦手だな」

「自分不器用ですから」

「不器用にも程がある」

「おっはよ」

「うお!ライカ。頼むから朝から

タツクルしないでくれ」

後ろからライカが強烈なタツクルをかましてきた。

「まあ、良いじゃない。で?学校生活はどうか?」

「まだ、二日目だが」

「良いじゃないのよ!はっはっはっは!!」

「朝…うるさい…ライカ…迷惑…頭…痛い」

「そう言うあんたはテンション低すぎるのよ!!」

「いや、フォレスぐらいがちょうどいいんだが」  
「え」

「早く行くぞ。遅刻するぞ」

「はい」

「了解」

「じゃあ、今日の連絡はお終い。授業頑張ってね」

フィーリ先生のSHRが終わり次は集にとって初めてとなる  
授業が始まるうとしていた。

「なあ、ゼロ」

「ん？どうかしたか？」

「授業って何やんだ？」

「授業は、歴史、用法、実践、研究って感じだな。  
一時間目はその内の用法だ。ほら、先生が来たぞ」

「授業を始める」

キーンコーン、カーンコーン

「む。ここまでか。じゃあ、今日は終わりだ。」

宿題はさっき言った通りの場所だ。

くれぐれも忘れるなよ？特に！ゼロ！」

「は。はい！」

「今度忘れたらみっちりしごいてやるからな」

「は、はい」

「つ、疲れた」

「全部寝ておいてよく言うな。ゼロ」

「寝るのも疲れるんだぜ？な、後でノート見せてくれ」

「良いけど、所々端折ってんぞ？」

「良いの、良いの」

「なら、良いが」

「さっすが集だぜ！トイレ行こうぜ」

「ん。分かった」

「にしても簡単だったな」

「まあ、まだ今は基本事項しかしてないし俺達一年だし」

「そうだな。ん？あれは？」

集が見たものは二人の生徒が言い争ってる場面だった。

「うわゝあれは関わらない方がいいな」

「何で？」

「よく見てみるよ。あの胸の刺繍」

「刺繍？あれがどうしたんだ？」

「あれが付いているのは貴族って印なんだよ」

「ふゝん」

「おい、お前、この俺にぶつかって何さまのつもりだ？」

「す、すいません」

「このワルロス家の長男にぶつかっておいて

それだけかよ？ああ！？」

「ご、ごめんなさい。で、でも急に貴方が出てきたから避けきれなくて」

「ああ！？この俺がわざとお前などにぶつかったとでもいうのか！？」

「な？やばいだろ？」

「ヤバいというか、ワルロスって奴名前にワルってあるから外見も悪そうだな」

「お、お前！くくくくく！……わ、笑かすなよ」

「ぷくくく!! だって、見るからに悪そうだろ?」  
「くくくく!! 我慢だ、我慢だ」

「貴様分かっていないようだな。貴様そこで脱げ」

「え?」

「あ?」

「聞こえなかったか? 脱げと言っている」

「い、嫌です!」

「ほう。カスの癖に貴族の言う事が聞けないのか!!」  
「ワルロスは女子生徒に手を振り上げた。」

「きゃ!!」

「貴様、何の真似だ?」

「こつちが聞きたいね。貴族の男子が  
か弱き乙女に手を挙げていいの?」

「ふん。そんな奴生きていても変わらないだろう」

「あ? 何だった」

「聞こえなかったか? 貴族でもない奴が生きていても  
意味がないと言っているんだ!!」

「集の中で何かが切れた。」

「ぐうえ!!」

「くくく!!!!!!!!」

「集はワルロスの顔を思いつき殴った。」

「貴族の何が偉いんだ? こら!!」

「な、何だと?」

「お前らは何をしたんだ!? ええ!?

お前らは所詮、親の七光で威張ってるだけだろうが!!  
お前は一体何をしたんだ!? 何か人に  
凄いいわれる事をしたのか!? ああ!?

「き、貴様!! 俺を侮辱する気か!?

「侮辱だど? お前がこいつを侮辱したんじゃないのか?」

「貴様!! 決闘だ!!」

「「「!!!」」」

「ああ、良い」

「待て!! 集! 決闘はよせ!!」

「何だよ?」

「貴族は俺たちみたいな平民よりも

魔力の潜在量が強いって決まってるんだよ!!」

「そんなもん誰が決めたんだ?」

「そ、それは」

「お前らはただ単に貴族が偉人の血を次いでいるからという  
事で強いとか思ってるのか?」

「……」

「んな訳があるか!!」

「!!!!」

「貴族の全員が強い!? そんな訳あるか!!」

「貴族だから俺たちよりも強い!?

「そんなもん誰が決めたんだ!!」

「ならば決闘を受けるのか?」

「ああ、上等だ!! 受けてやる」

「ふん! 後悔するなよ?」





「いいじゃない。ゆえ」

「ライカ！！だが」

「どうしたの？あんたらしくないわよ？」

「だが」

「大丈夫だよ！！きつと集は勝つよ！！ね？」

「当たり前だ！！絶対に勝つてやる！！」

ゆえ side

ゆえは自室で考えていた。

「なぜ私はあの時、あそこまで必死になって集を止めたんだ？集が怪我をするからか？」

いや、集は確かに強くはなっている。だが、その強さは平民の中で言う事で、

いや、だが貴族とも…あゝもう。分からん。考えれば考えるほど泥沼にはまっていった。

「ゆえちゃん。ご飯出来たから降りておいで」

「はい。ま、良いか」

「ご馳走様でした」

「はい。美味しかったかしら？」

「はい！とても美味しかったです！！」

「ふふふ、ありがと。食器は置いておいていいわよ」

「はい、ありがとうございます！！」

「集、少しいいか？」

「あ、悪い、ゆえ。寝る前で良いか？」

「あ、ああ別に良いが」

「悪いな」

そう言い集はどこかへと出かけてしまった。

「最近、集君食事が終わったらすぐにどこかに行くわね」

「え？それって本当？お母さん」

「うん。だって昨日も食べた後に出て行って

帰って来たのは夜遅かったかしらね」

「そう…ありがとう。ご馳走様でした」

「はい」

ゆえがシャワーを浴び終わり場行の復習が

終わった時間になっても集は帰っていなかった。

「あ、しまった。教室に宿題を忘れた。

仕方無い。取りに行くか」

「あつた。あつた。これが無いと宿題が出来ないな。ん？」

ゆえが帰ろうとしている時に地下鍛錬室の

明かりがついている事に気がついた。

「こんな時間に誰が？」

ゆえはつけっ放しかと思い確認しに行くとそこには…

「集？」

集が一人で鍛錬をしていた。

「はあ、はあ。まだだ！！」

集は立ち上がり炎の魔法を放つが出した途端に

炸裂し、炎が辺りに拡散された。

へ凄い威力だな。初級魔法でありながら

ここまでの威力を出すとは。

だが、やはり細かい作業が苦手のような」

「またか…次やるか!!」

集はまた立ち上がり鍛錬を一人黙々と続けた。

「頑張れよ。集」

ゆえは敢えて集には声をかけずに気付かれないように鍛錬室から抜けた。

第5話 決闘の申し込み、そしてランカーの存在（後書き）

こんばんわ、ケンです!!!

如何でしたか？

感想もお待ちしております!!

それでは!!

## 第6話 初めての模擬戦、

「んゝ…やべえ！！寝過ぎた！！」

集は鍛錬の時間を大幅に過ぎた時間に起きた。

何せ昨日は細かい作業の鍛錬をしていたら

気付いたら日付が変わる寸前だった為慌てて帰り寝たのは良いが結果はこれだ。

「やばい、やばい！ゆえに怒られる！！」

集は慌てて階段を降り居間に入った。

「悪い！！ゆえ！！寝坊した！！」

「ん？集か。まだ、6：30だぞ？学校に行くには速い時間だぞ？」

「へ？」

予想とは違いゆえは満面の笑みで集を迎えた。

「い、いやだから鍛錬は」

「ああ、鍛錬か。あれは曜日毎にしようと思う」

「曜日毎に？」

「ああ、今日は休みにして明日にしようと思うのだが？」

「あ、ああ。そうさせてもらう」

「じゃあ、まずは顔を洗ってきたら？集君」

「あ、はい。そうさせて頂きます」

「珍しいわね。ゆえちゃんが人を気遣うなんて」

「か、母さん！！人を鬼のように言わないでよ！！」

「あらあら。そこまで反応するなんて、もしかして集君の事が」

「集！！やはり鍛錬をするぞ！！」

「はー！！？ちょ、ちょっと待て！！今さっき今日は休みだって！！」

「前言撤回だ！！鍛錬は毎日してこそその鍛錬だ！！行くぞ！！決闘は明日なのだぞ！！」

「へーい。ようやく寝れると思ったのに」

「なんか言ったか！！」

「い、いえ何もありません！！」

ゆえは顔を赤くしながら集を掴み出で行った。

「でも、本当に変わったわねーゆえちゃん。

これも集君が来てくれたおかげかな？」

母は嬉しそうに顔を緩めた。

「で？今日は何をするんだ？」

「今日は私と模擬戦だ」

「了解」

「準備は良いか？」

「ああ、いつでも」

辺りに一瞬静かな空気が流れるがその空気は何かが爆破するような音で砕かれた。

「せい！！」

「うお！！」

何とか避けたが髪の毛が何本か抜けた。

「何だ今の？何かが発したような音が一瞬した後、ゆえが目の前にいて、そして殴られた」  
集はいったん距離を取りながら考えた。

「さあ、次行くぞ！！」

「つまりあの音がしたら伏せればいい事！！」  
そして音が一瞬間こえ、ゆえが消えた。

「喰らうか！！」

集が伏せた瞬間、何かが通り過ぎた感じがした後に連れて放たれた炎に飲み込まれてしまった。

「たわけが。二度も同じ技を連続で使うと思うか？

使えば使うほど技は相手に慣れを与え避けられるものだ」

ゆえが言い終わった瞬間、炎が急に鎮火した。

「危なかった」

「ギリギリで自らを凍らして炎のダメージを無くしたか」

「いや、ほんと危なかったよ。昨日までの僕だったら確実にやられてた」

「ほ、昨日の自分よりも強いと」

「ああ。それと余所見は禁物だ。ゆえ」

「な」

ゆえが言いかけた瞬間、上空から氷柱が何本も落ちてきた。

「この前の僕は体に触れている部分でしか凍らす事は出来なかったけど、今は触れていない部分でも

ある程度の距離は遠くの物も凍らせるようになった」

「そうか。それは喜ばしい事だ。だが、この程度で

私は倒せんぞ」

氷柱から火柱が立ち氷柱を一気に水へと

変えてゆえが現れた。

「ああ、そう思ってるよ！！」

集が腕を前に出すと

冷気が放出されゆえも炎を放出し防いだ。

「こんなものなのか？お前の力は！？」

「んな訳ねえだろ！！」

集はさらに腕を振るい凍らしていくがゆえはそれを魔法も使わずに全て避けていった。



「可笑しい。何故さつきから同じ攻撃ばかりしている」

先程から集は空間を叩くようにして凍らしていくが

先程から何度も避けられているにもかかわらず同じ攻撃をしていた。

「同じ攻撃ばかりして勝てると思ってるのか!？」

「さあね？」

「ならばな！！！」

ゆえが言いかけた時何かにぶつかった。

「これは、氷？…まさか!？」

ゆえは慌てて周りを見渡すが既に

周りは氷山のような氷により回避場所が無くなっており

ゆえは氷に囲まれ逃げ道が無かった。

さらに大部分が水びたしになっていた。

「何もなしに同じ攻撃ばかりする訳ねえだろ!？」

突然、地面から全体に電気が流れ込んできた。

「うぐ!!!まさか、この為に同じ攻撃で氷を作り

逃げ場をなくしていたのか」

「そうだ!!」

「!!!!!!」

見上げると集は空中に飛んでいた。

「さあ、終わりだ!!」

集は逃げ道のないゆえに向かって腕を振るい

氷の魔法を最大威力で放った。

「残念だが終わるのは君だ」

「?????」

ゆえが地面を強く蹴ると円状に炎が展開していき  
部屋全体を覆うほどの巨大な火柱をたてた。

それにより全ての氷は溶かされ集は空中にいるので回避ができずに直撃した。

「はあ、はあ、はあ」

「私の勝ちだ、集」

集の首には刀が当てられており

周りにはいつでも攻撃できるように炎が揺らめいていた。  
「負けました」

「あゝ疲れた」

「当たり前だ。あれだけばこすかと魔力の残量を考えずに使えば切れるに決まっているだろう」

「んゝつい意識から飛んでしまうというか」

「はゝそんな事で勝てるのか？明日の決闘に」

「あんたとあんな奴を比較したらダメでしょが」

「ライカ！」

後ろからライカが話に割り込んできた。

「おはよ。にしても傷だらけねゝ集」

集の全身には包帯が巻かれていた。

「ん、まあねゝ。じゃあ、僕はこっちだから」

「ん。また放課後ねゝ」

集は二人と別れ教室へと向かって行った。

「ねえ、ゆえ」

「何だ？ライカ」

「あの時の魔力からしたらあんた外さなかったのね？」

「ああ、外したらあいつは」



「だったら」

「でも、如月集君の実力が見たいんですよ。

一組に入れる實力を持ちながら敢えて八組に行った彼の實力と魔法をね」

「残念だが集君は君の見たがっている氷は使わないぞ？」

「でしようね。しかし、それだけが彼が一組に入れる理由ではないんでしょ？」

「……」

「勝手ながら私はあの編入試験の様子を見させていただきました」

「は、何度言えば分かる。あれは教員以外閲覧禁止だぞ」

「まあ、そこは置いておいて率直に思ったのは異常ですね」

「異常？彼が？貴方達の様に？」

「ええ。彼のあの攻撃の避けはもはや、天賦の才能でしょう。

恐らくこの学園で一番、効率よくかつ疲労が少ない

避け方でしたよ。あんな芸当は恐らく我々でも無理かと」

「……それで」

「後は応用性です。発言した直後というものはどのように使うかがあやふやですが彼は違った。

発言直後のあの、氷柱による接近は初心者とは思えないですよ。

まあ、まだ素人なので負ける気はしませんかね」

「ほ、そこまで気付いていたとは、大したものだ」

「これでも伊達に第四位をさせて頂いていますから」

「あの、そう言えば何ですがランカーって

全部で十人ですよね？」

「ああ、そうだが」

「でも、分かっているのはたった数人ですよね？」

「ええ、皆シャイなんでしょう」

「それだけなんでしょうか？」

「さあな。とにかく明日の決闘は決行だ！！異議は認めん！！」

## 第6話 初めての模擬戦、（後書き）

こんばんわ！！ケンです！！

如何でしたか！？

つくづく自分の文才の無さを感じさせられますね。

他の方の作品を見ている時は特に。

感想もお待ちしております！！

それでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7088y/>

---

マジックワールド。魔法の世界へようこそ

2011年11月23日16時48分発行